

物にはアドレスがある

長谷川和美

スーパーで気になって仕方ないことがある。それは、カテゴリーの違う棚に戻された商品の数々。元は鮮魚コーナーにあったはずのサワラのパックが肉の中から堂々とこちらを見ていた。はじめ魚で夕飯を作ろうと思っていたけれど、肉を見たら心変わりしたのだろう。けれど、元の売り場に戻るのには面倒くさいからここに置いてレジへ向かったのだろうか。これはまだ許せる。

一度あぜんとしたことがある。それは、野菜のコーナーで里芋を選んだが、冷凍里芋の手軽さに負けて生の里芋を冷凍庫の中へ置いたというストリーが容易に想像できた。冷凍庫の中に土のついた里芋！これは完全にアウトだ。

自分自身、こうした害を被りそうになった。豆腐を買おうと一つ手に取り、買い物かごに入れたものの、何か違和感があったので、よく見るとそれは牛乳ゼリーだった。白かったので一瞬、豆腐だと思えたが重量感が無かった。

途端に怒りが湧いてきた。一度手に取ったなら、お金を払うまで責任を持つべきだと。売り物にならなくなった商品が出たなら、それは犯罪ではないのだろうか、とまで考えた。

こういうことは気になる私だが、家の中で、使ったものを元に戻しているかと胸に手を当てて考えたら、そうではないと顔が赤くなる。

片付けが苦手な私は、少し油断すると紙類に机の上を占領される。平生、家族からは「物にはアドレスがある」と言われ続けている。

たしかに元にあった場所に返せば、スッキリするだろう。返せないものは処分すればよい。散らかることはなくなる。しかし、そうは簡単にできなくて不要なものが増え続けているのには、理由がある。

例えばDMだ。見て不要なら捨てればよいところを「これを作るのには、担当者が苦勞してレイアウトを考え印刷屋に出し、それ相応の経費をかけたうえ、送料もかかっている。しかも、この写真はなかなか良いではないか。いつか何かの資料になるかもしれない」しかしそのような「いつか」など、やってくることはない。封筒に戻されたDMは次にやってきたDMに埋もれていく。

4年前、ついに物を捨てるチャンスがやってきた。それは、家を建て替えるための引越しだった。最低限の家具以外は嫁入りたんすであろうが何であろうが処分した。

物が捨てられない私は、未だに心のどこかで、別れた物たちにわびている。ひいては、買ってくれた両親にわびているのだが、こんな自分を片付けたいところだ。

完成した新居に引っ越し、しばらくはスッキリした生活をしていったが、捨ててしまったあの日の空洞を埋めなければと、物を抱え込む自分が復活したのだろう。自分の部屋には、物があふれている。

片付けなくてはと思いつながら、物に囲まれていると妙に落ち着いた気分になる。

作者 長谷川和美

題名 物には「アドレスがある」

山陽新聞夕刊エッセー

2019.7.11 掲載